

はじめに

近年、欧米諸国では政治的、社会的な分断が深刻になっています。意見の違いが単なる対立にとどまらず、相手の主張を聞こうとしない、あるいは相手の存在そのものを認めようとしないところまで進むことがあります。

日本は、今のところそこまでには至っていません。しかし、国内外の情勢を巡って、一つの情報、一つの立場だけから物事を判断し、「自分の見方こそ正しい」と思い込む傾向が強まっているように感じます。

問題は、右か左か、保守かリベラルかではありません。自分の考えを絶対視し、異なる考えを受け入れなくなることです。

それがさらに進めば、社会の不寛容、分断、そして過激化、急進化へとつながる危険があります。そうなる前に何ができるのか。今回は、そのことを考えてみます。

1 寛容でなくなった社会

（1）世界で進む分断

現在の世界を見渡すと、様々なところで社会の二極化が進んでいます。

米国では政治的立場による対立が激しく、欧州でも移民、難民、環境政策、民族、宗教、経済格差などを巡って社会の亀裂が目立つようになりました。

本来、民主主義社会に異なる意見が存在するのは当然のことです。様々な考え方を持つ人々が議論し、互いに譲るべきところは譲りながら合意点を探す。それが民主主義の一つの基本であるはずですが。

ところが最近では、「意見が違う」ということが、いつの間にか「相手が間違っている」に変わり、さらに「そのような考え方をする人間は許せない」というところまで進むことがあります。

意見の対立が、人間そのものへの否定に変わりつつあるのです。

（2）日本も例外ではない

日本人は、一般的に激しい対立を好まず、周囲との調和を重んじてきました。それが日本社会の安定に寄与してきた面は少なくありません。

しかし、インターネット、とりわけ SNS の普及によって事情が変わりました。かつては新聞やテレビなどを通じ、国民の多くがある程度共通した情報に接していました。現在は一人一人が全く異なる情報環境の中で暮らしています。

自分が関心を持つ情報、自分の考えと一致する情報が次々と目に入ってきます。その状態が長く続けば、「世の中の人も皆そう考えている」「反対する人は何も分かっていない」と錯覚しても不思議ではありません。

もちろん、SNS そのものが悪いわけではありません。既存の報道機関が扱わない情報に誰でも接することができ、個人が自由に意見を発信できるようになったことには大きな意義があります。

問題は、情報の量が増えたにもかかわらず、人間の側がかえって自分の好む情報だけを見るようになってきていることです。

情報が多いことと、多面的に物事を見ることとは、決して同じではありません。

2 何故、人は過激化・急進化するのか

（1）二項対立の分かりやすさ

複雑な問題を、「善か悪か」「味方か敵か」「正義か不正義か」と二つに分ければ、話は非常に分かりやすくなります。

政治運動や社会運動でも、「一方にはこうした事情があり、他方にも理由がある」と説明するより、「われわれが正しく、相手が間違っている」と言い切る方が、人を引き付けやすいものです。

旗幟を鮮明にすればするほど仲間も集まりやすくなります。

しかし、現実の国内問題や国際問題は、それほど単純ではありません。長い歴史、経済的事情、民族や宗教、国家間の利害、個人の感情など、多くの要素が重なっています。

それを善悪二つに切り分ければ、確かに理解した気にはなります。しかし、分かりやすさと真実とは別のものです。

(2) 仲間が集まるほど主張は強くなる

同じ意見を持つ人々が集まれば、互いの考えを肯定し合います。

「自分は間違っていなかった」そう確認できることは心地よいものです。

さらに、その集団の中で自分の存在感を示そうとすれば、穏健な意見よりも強い意見を言った方が目立ちます。誰かが強い発言をすれば、それ以上に強い発言をする人が現れます。

こうした相互作用が続くと、当初は穏健だった集団であっても、徐々に主張が先鋭化することがあります。

SNSは、この作用をさらに強くします。

穏当で慎重な意見より、怒りを誘う言葉、断定的な主張、刺激的な映像の方が拡散されやすい。そこへ新聞、テレビなどの既存メディアが反応すると、さらに多くの人の目に触れます。

その結果、ごく一部の極端な主張が、あたかも社会全体を代表する意見のように見えることさえあります。

(3) 「正義」が独善に変わる時

もう一つ注意しなければならないのが「正義」です。正義、人権、平和、自由、平等、愛、弱者の保護。いずれも社会にとって欠かすことのできない大切な価値です。

しかし、どれほど美しい価値であっても、それだけが無制限に追求すれば、別の価値と衝突します。

自由を最大限に認めようとするれば、時として社会の秩序との調整が必要になります。平等を徹底しようとするれば、個人の自由との均衡が問題になります。環境保護を進めるにも、雇用、産業、生活費などとの調整が欠かせません。

社会とは、複数の「正しさ」の間で均衡点を探し続けるものです。ところが、自分の信じる正義だけを絶対化すると、「正しい目的なのだから、多少強引なことをしても構わない」という考えが生まれます。

そして、「反対する者は悪である」「悪の意見など聞く必要はない」となれば、正義は独善へと変わります。

正義感そのものが問題なのではありません。自分の正義だけが唯一の正義だと思い始めるところに危険があるのです。

(4) 孤立感と承認欲求

過激化を政治的な思想だけで説明することもできません。

社会に対する不公平感、自分は正当に評価されていないという思い、孤立感、疎外感、承認欲求などが重なっている場合もあります。

現実の社会で居場所を見いだせなかった人が、ある集団から「あなたは仲間だ」

「あなたこそ真実を理解している」と認められれば、その集団は大切な居場所になります。

やがて仲間との一体感が強くなり、その集団の主張と自分自身とを切り離せなくなる場合があります。

集団への批判を、自分自身への攻撃のように受け止めるようになれば、冷静な議論は難しくなります。

中庸な発言よりも過激な発言の方が仲間から評価されるような集団であれば、なおさらです。

人間には誰しも「認められたい」「仲間でありたい」という感情があります。それ自体は自然なものです。それが強い集団意識と結び付いた時には注意が必要です。

3 一方的な思い込みがもたらすもの

(1) 社会から対話が消える

過激化、急進化の大きな弊害は、異なる意見を持つ者同士の対話が成立しなくなることです。

民主主義は単なる多数決ではありません。「自分とは違う考えを持つ人も、同じ社会の一員である」この認識があって初めて成り立ちます。

ところが、異論を唱える人を「敵」「無知」「極右」「極左」など一括りにしてしまえば、その人の主張を一つ一つ検討する必要がなくなります。

レッテルを貼ることは簡単です。しかし、レッテルを貼った瞬間に対話も終わります。社会に残るのは、「どちらの主張がより妥当なのか」という議論ではなく、「どちらが相手を打ち負かすか」という争いです。

(2) 目的のためには手段を選ばない

さらに危険なのは、「これほど正しい目的なのだから、多少のことは許される」という考えです。

誹謗中傷や嫌がらせから始まり、脅迫、さらには現実の暴力へ向かうこともあります。

組織から直接指示されたわけでもない個人が、インターネットなどを通じて強い影響を受け、単独で暴力行為に及ぶ、いわゆるローンオフエンダーの問題もあります。

もちろん、強い政治的主張を持つことと暴力行為とは同じではありません。そこを短絡的に結び付けるべきではありません。

しかし、

「自分たちの正義だけが唯一の正義である」 「相手とは話し合う必要がない」

「正しい目的のためなら手段は問わない」 この三つが重なれば、社会にとって危険な状態となります。

歪んだ正義観が独善となり、やがて目的が手段を正当化する。その道筋には常に警戒が必要です。

4 日本社会への処方箋——複数の「目」を持つ

それでは、一方的な思い込みを避けるためには何が必要なのでしょうか。

私は、特定の思想や価値観を教え込むのではなく、物事を複数の方向から見る習慣を身につけることが大切だと考えます。

そのための方法を、いくつかの「目」に例えて整理してみます。

(同期中垣兄の資料から)

(1) 鳥の目——全体を見る

まず、高いところから全体を眺める「鳥の目」です。

一つの事件、一人の発言、一つの数字だけを見て社会全体を判断してはいけません。

SNSで大騒ぎになっている出来事が、本当に国民全体にとってそれほど重大な問題なのか。一つの事件が、本当に社会全体の傾向を表しているのか。

一歩引き、大局から眺める必要があります。

(2) 虫の目——細部を見る

その一方で、対象に近づき細部を見る「虫の目」も必要です。

「日本人」「外国人」「若者」「高齢者」「富裕層」「貧困層」など、大きな括りだけで人を見れば、その中にいる一人一人の違いが消えてしまいます。

統計や数字を見ることは重要ですが、その数字の背後にいる人間を見ることも忘れてはなりません。

鳥の目だけでも、虫の目だけでも足りません。全体と細部の両方を見る必要があります。

(3) トンボの目——多面的に見る

トンボの複眼のように、一つの出来事を複数の角度から見ること重要。

外交問題であれば、日本から見た姿と相手国から見た姿は異なります。さらに第三国から見れば、また違った景色が見えます。

国内政策でも、政府、企業、労働者、消費者、高齢者、若者、そして将来世代では立場が違います。

「もし自分が相手の立場だったら、これはどう見えるのか」

この問いを一度加えるだけで、自分の思い込みからかなり離れることができます。

(4) 魚の目——流れを見る

魚が川や潮の流れを感じながら泳ぐように、時間の「流れ」を見る目も必要。

現在の一点だけを見るのではなく、

「十年前はどうだったのか」「何故、現在の状態になったのか」「この状態が続けば五年後、十年後はどうなるのか」と考えます。

特に国際情勢では、この「魚の目」を欠かすことができません。

今日突然始まったように見える紛争や国家間の対立にも、その背後には長い歴史があります。

現在だけを切り取れば、善悪は簡単に決められます。しかし、歴史という時間軸を加えれば、物事はそう単純ではないことが分かります。

(5) 蝙蝠の目——逆から見る

蝙蝠が逆さにぶら下がる姿になぞらえて、常識とは逆の方向から眺める「蝙蝠の目」も必要。

例えば、

「自分が支持している側が同じことをしたら、同じように評価するだろうか」

「自分が嫌っている人物ではなく、好きな人物が同じ発言をしたらどう思うだろうか」と考えてみます。

これは、自分自身の偏りを知るために有効な方法。

人間は、自分に都合のよい情報は受け入れやすく、不都合な情報は疑いやすいものです。

だからこそ、時には意識して物事を逆さから見る必要があります。

5 正解や正義は一つではない

(1) 自分に都合の悪い情報を見る

物事を多面的に考えるために最も大切で、同時に最も難しいことは、自分に都合の悪い情報を見ることです。

自分の考えを裏付ける資料を百集めても、それだけで自分の考えが正しいことの証明にはなりません。

むしろ、

「もし自分が間違っているとすれば、どこだろうか」と問い、自分の考えに反する事実を探す方が重要です。

自分の考えを持つことは必要です。しかし、心の片隅に「自分も間違っているかもしれない」という余地を残しておく。

それが中庸というものではないかと考えます。

(2) 「分からない」と言うこと

現在は、何か事件が起きますと、すぐに賛成か反対か、右か左か、どちら側なのかを問われるような風潮があります。

しかし、複雑な問題ほど、簡単には答えを出せません。「今の段階では判断できない」「双方の言い分に一理ある」「もう少し調べなければ分からない」
こう言うことは、決して逃げではありません。

十分な材料がないにもかかわらず、自信満々に断定する方が危険です。

「分からない」と言える余裕を社会全体が持つことも、過激化を防ぐ一つの防波堤となります。

(3) 教育で身につけたい九つの視点

学校教育でも、決められた正解を覚えるだけでなく、一つの問題を様々な方向から考える訓練を、もっと取り入れてよいと思います。

整理すれば、次の九つになります。

- ①全体を見る。 ②細部を見る。 ③多面的に見る。 ④変化や流れを見る。
- ⑤逆方向から見る。 ⑥異なる立場や感覚から見る。
- ⑦自分に都合の悪い情報を見る。 ⑧確率は低くても重大な可能性を見る。
- ⑨自分の認識は全体の一部分に過ぎないと自覚する。

の九つを常に意識することができれば、一つの情報だけを見て物事を決めつけること、かなり少なくなるはずです。

むすび——中庸とは「どっちつかず」ではない

「中庸」という言葉は、ともすれば「曖昧」「どっちつかず」「自分の意見を持たない」という意味に受け取られます。

しかし、本来の中庸は、そのようなものではないはずです。

自分の意見は持つ。しかし、自分の意見だけが絶対に正しいとは考えない。

相手の意見にも耳を傾け、自分にとって不都合な事実からも目をそらさない。

その上で最後は、自分自身で判断する。

これが中庸の姿ではないでしょうか。

社会を分断するのは、意見が異なること自体ではありません。

「自分だけが正しく、相手は間違っている」と思い込むことです。

保守にもリベラルにも、正しいところがあり、間違うところがあります。政府も間違えます。メディアも間違えます。専門家も間違えます。

そして、私たち自身も間違えます。

だからこそ、鳥の目、虫の目、トンボの目、魚の目、蝙蝠の目を持ち、同じ出来事を何度も違う角度から見直す必要があります。

日本社会は、まだ欧米の一部に見られるような決定的な分断状態には至っていません。
だからこそ、今のうちに考えておく必要があります。

異なる意見を持つ人を直ちに敵としないこと。

「相手にも一理あるかもしれない」と考える余裕を失わないこと。

正義を大切にしながら、正義に酔わないこと。

そして、「自分が見ているものは、世界の一部分に過ぎない」という自覚を持つことです。

派手な処方箋ではありません。しかし、このような一人一人の姿勢こそが、日本社会を過激化、急進化、そして深刻な分断から守る、最も確かな方法だと考えます。

(了)